

研究・調査報告書

分類番号	報告書番号	担当
A-169	16-111	滋賀医科大学社会医学講座公衆衛生学部門
題名 (原題/訳)		
A Prospective Study of Alcohol Consumption and Smoking and the Risk of Major Gastrointestinal Bleeding in Men. 男性における飲酒と喫煙とが消化管大量出血リスクにおよぼす影響(前向き研究)		
執筆者		
Strate LL, Singh P, Boylan MR, Piawah S, Cao Y, Chan AT.		
掲載誌		
Am J Cardiol. 2016 Oct 15;118(8):1201-1206. doi: 10.1016/j.amjcard.2016.07.033. Epub 2016 Jul 29.		
キーワード		PMID
飲酒、喫煙、消化管出血、男性		27824864
要 旨		
目的：		
喫煙・飲酒と消化管出血リスクに関するデータは少なく、結果についても一貫性が無い。筆者らは大規模コホートにおいて喫煙・飲酒と消化管大量出血リスクとの関連を検討した。		
方法：		
Health Professional follow-up Study(HPFS)に参加した男性 48,000 名(1986 年、研究開始時 40~75 歳)を前向きに観察した。2 年ごとの質問票とカルテから入院または輸血を要する消化管大量出血の男性を同定した。		
結果：		
26 年間で 305 件の消化管大量出血が同定された。飲酒量が 30g/日を超える男性は非飲酒者に対して多変量調整後の相対リスク(RR) 1.43 (95%CI: 0.88-2.35, P trend 0.006)であった。飲酒は主に上部消化管出血と関連しているようで、非飲酒者に比較した飲酒量>30g/日の者の相対リスクは 1.35 (95%CI: 0.66-2.77, P trend 0.02)であった。アルコール飲料別に検討したところ、週 5 杯以上蒸留酒を飲む男性は月 1 杯未満の男性に対して RR1.72 (95%CI: 1.26-2.35, P trend <0.001)であった。ワインとビールには消化管大量出血との有意な関連が見られなかった。NSAIDs/アスピリン関連消化管出血のリスクは飲酒量の増加とともに上昇し、非飲酒者を対照として 1-14g/日では RR1.37(95%CI: 0.85-2.19)、15g/日以上では RR1.75(95%CI: 1.07-2.88)であった。喫煙と消化管出血との有意な関連は見られなかった。		
結論：		
飲酒は消化管大量出血のリスク上昇と関連が見られたが、喫煙では見られなかった。最も顕著だったのは上部消化管出血と蒸留酒の関連であった。アルコールは NSAIDs 関連消化管出血のリスクを上昇させるようである。		